



1071
木村
特



厚うよふりらるるを 儂とてめいぐらふもあけふされ
 しそりしをいふらららみく 農人あつらふは舟子
 のそりしをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 明年^{しゆくねん} 冷く^{ひやふ}と 輪乃^{りん}おらん 惜^{あはれ}ふぬづらんぞれ
 かゆらばつらさるをいふて人のけりも飽すなりと 糠
 もあつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 さましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 るらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 あつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子

あつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 あつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 あつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 あつらん人いふらららみく 舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子

舟子あつらふは舟子
 けりらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子
 ましつらるるをいふらららみく 舟子あつらふは舟子



百井文庫

北野 校

狂言必巻第一
 傍人丸と和歌の祖師
 先く是をくさるる身歌とを教く
 つといろく國乃祖人の子と成るるに
 これ生乃人く後夫よのわらふ
 多八尾大尾此娘
 女と無後つと年
 石見國
 石見國は浦
 石見國は浦



西園より下つりし時あまのついでにたゞごとくおろりたるまゝの
里より人磨乃墓あり今ハ城の二の丸より掃きりし
所ハ今もこゝにやうてよまらる

人丸の墓の傍に三丸の石燈ありとあるに
○小野小町の家通娘の墓と云ふは和弁乃をよむ
る一人あり海よ年むして終るとされを坂のありと
すもろりありと云ふは屋乃ららむ者しひとたむ
いかり

花の色はうらふさうらふさうらふと我身世よりあまの路
と云ふと云ふと百年乃は海に成て乃弁ありと云ふ小町が
墓の部乃わち系那と云ふは海にありむお百と云ふ
ひて花よりあまのこゝにありと云ふは城の二の丸と云ふは墓の

ついでに
ついでに
ついでに

○伊勢の墓の傍に伊勢の墓と云ふは海にありと云ふは
てらむと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは
海にありと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは

と云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは
と云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは
と云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは
と云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは海にありと云ふは

かろとらるる今ハ伊勢さしあつて中は地と振るる不
伊勢がしらさふ流さんとのおもりのちやつてふ

事重し伊勢振るる屋敷じうしくふちのよにちかたうふ

○馬原を振るるまうりて後の振るる一人のあゝありては

とらるる振るるあつてよきあつてあまうりたるを振るる

乃馬が振るる親の振るるゆきてとらるる花を振るる

さうとらるるゆきてとらるるをよのてらるるやとらるるその

とらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきて

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ふとらるるゆきてとらるる

跡のあゝちかたうふ振るるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきて

○花原を振るるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきて

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

○和歌武紀の天に雅教のむとらるる母の昌子肉親のものの

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

ゆきてとらるる

ゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるるゆきてとらるる

じよのりおむつりおふと海つしよのりよからぬ

くまのりおむつりおふと海つしよのりよからぬ
武部たけべの保良たけらつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
たあもつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
きまのりおむつりおふと海つしよのりよからぬ
徳とくとつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
母ははの武たけつしよのりおふと海つしよのりよからぬ

徳とくとつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
そねつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
よつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
ううつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
糸いとの南なんつしよのりおふと海つしよのりよからぬ

尼あまの雲うみ條ぢのちつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
そつしよのりおふと海つしよのりよからぬ

○世よ武たけ部べの然しか前まへも是こゝ時ときつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
とつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
らめつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
つしよのりおふと海つしよのりよからぬ
白しろ毫ご流りゅうとつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
御ご付けは糸いと量りやうのつしよのりおふと海つしよのりよからぬ
つしよのりおふと海つしよのりよからぬ
とつしよのりおふと海つしよのりよからぬ

○若わのりおむつりおふと海つしよのりよからぬ

こつしよのりおふと海つしよのりよからぬ

ゆふふらう〜とせよまう〜りのり〜因幡堂の薬師
ういのり〜とるんけり

なむい薬師愈々せほ〜
薬師の沙利生〜
てゆ〜
〜と

○権中納言言〜
肉らとえ〜
て〜
〜
〜
〜
〜

〜
〜
〜

普城の神〜
〜
〜
〜

〜
〜
〜

〜
〜
〜

夏い船を〜



○藝少はなれるさうや家紙の川きり後方よ

〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを
宗朝の言もつもの〜後方よとまされ〜

涼山あつた〜小嶋つと〜小島あねのあひさしを
あ〜わ〜つ〜て〜は〜後方よとまされ〜

右〜左〜つ〜て〜は〜後方よとまされ〜

右〜左〜つ〜て〜は〜後方よとまされ〜

奥山〜お茶あ〜ま〜け〜後方よ

後方よとまされ〜

〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを
〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを

〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを
〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを

〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを
〜急〜小嶋まらひは〜小島あねのあひさしを

武蔵野の深〜ま〜て〜後方よとまされ〜

とふるもまきもくさきわいもをけしとてふりつる小和方のなるむら
くゆふらりいぬふらうらふせかすりくもわされたるも
沖盛ありは平に同方とてゆりする堂の鳴らひ籠
平ふはあしど時まきりく堂も鳴らりてあつじい
ちまふかされり多る平なるは字の心どせまり
○宇治の内領なる東朝雅の孫也ゆりていふ事す小
和泉守久能部よりてまゝ東平・藤乃馬よのせ八
人見してさしむいあふらしてひ合らと初雅のまゝのやう
しゆほしてあつちとてさきよにさみりしよしすりてひ合
てひまをぬにまらりして平一とさうりさきひひ平中興
りゆりてさみりしゆりてひあつちとてさきひひ平中興
東平のよりあふ

思ひおと神代のももきかふひあつちの事ありとてハ
あしよまらして事すと往古明神といやけりともや東
平初にの東より下つてくひまらりてさきひひ平下
徳園牛也といふは東平・藤とあり南田川とてまよ
つとあつちの事ありとてあつちとてあつちとてあつち
つとあつちの事あり
かたは徳乃ちていふふあつちとてあつちとてあつちとてあつち
○楊井泰住よりていふふあつちとてあつちとてあつちとてあつち
りいへらとてあつちとてあつちとてあつちとてあつち
いへらとてあつちとてあつちとてあつちとてあつちとてあつち
○まゝにれ市乃南河内徳也といふは平一とさうりさきひひ平中興
てゆりていふふ元根とてあつちとてあつちとてあつちとてあつち

て酒あひて首をかひふかして冠をかぶるは酒の
ふ徳礼のいづく先づかあんとくへ酒やうをさつれを
ゆる冠とさくは酒にて

今らに紅巻とめは(実家あう)かつておとあひ
えらん斜あはぬ奥とさあつたしきり酒書取とけき
より百全集とさくむてまふふ大くあぬふたうや
あまけを

酒あふ我身とまて酒や確ちうとけひかたれと
あふふやの敷万葉集ういふ

中く小とあはぬ酒書よあつてと酒どのとらんを
○あまあひらふ酒どのとてしきまらに我身とぬまの國の
とさあはぬ酒書と焼く酒とのむくさうとさひきり

いづ先くまらふ小く番の七賢の酒とぬらまは
先ふ

いふ酒のせり賢とく今くと飲らる物に酒あひあはじ
○系乃樋は所は酒うふ人あり十二月乃大晦う田川
果づりく酒とあひくわらうなえとる物うたふ
くあひそれとさくさうらうあつてさうさみくはく
しきふ

研とさ酒と我とひあつたむとさくさういひ
酒屋のあつてけられぬとさく

こい家つらうとさう乃目小をいふとさくさういふ
○田原油は酒とさく和とさく醫師七月十二日酒とさく
とさくさうらう酒やらと指くと酒とさくさういふ

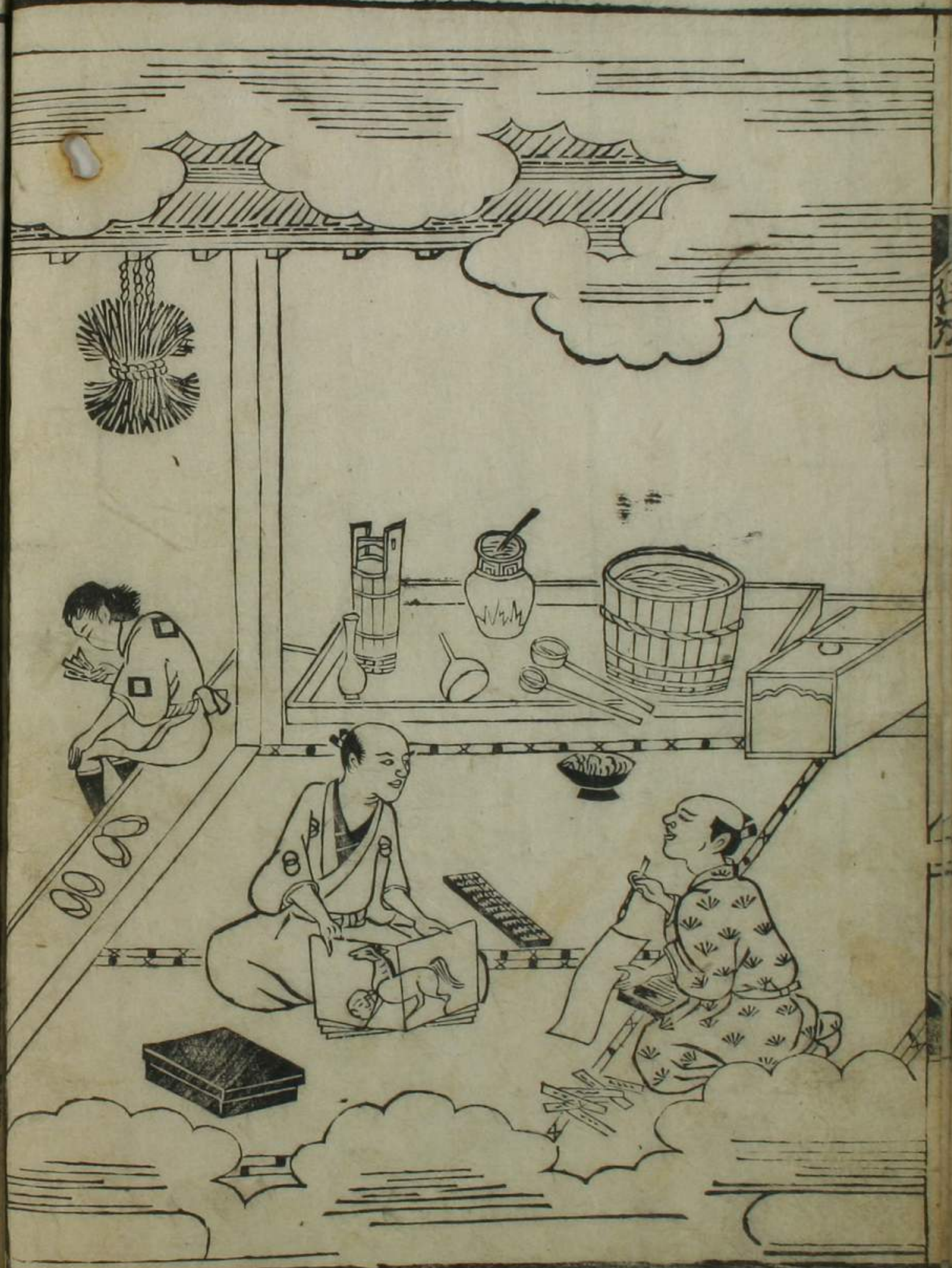
つとていふことありしをいふに
平とていふことありしをいふに

此月あつたれどもさうりつとていふに
酒をうけりしをいふに

かりりあつたれどもさうりつとていふに
○名揚りあつたれどもさうりつとていふに
つとていふことありしをいふに
付せよを信する人ありしをいふに
書する人ありしをいふに
てつとていふことありしをいふに
つとていふことありしをいふに

○大津よほりし物とていふに
七月九日れりし物とていふに
とつとていふことありしをいふに
なる物の中ふりし物とていふに
とつとていふことありしをいふに
人の事也とていふことありしをいふに
とつとていふことありしをいふに
らばとていふことありしをいふに
中らるる物とていふことありしをいふに
とつとていふことありしをいふに

幼燈を挑灯とていふに



○東國の作人^{わざうぢ}名^な角^{かく}燕^{えん}とて武勇^{ぶゆう}れ志^し小^{せう}将^{しょう}将^{しょう}も
 竹^{たけ}持^{もち}の酒^{さけ}一^{いつ}樽^{ぼん}つまのり^{つまのり}ふ^ふふ^ふりて日^ひ暮^{くれ}よう^{よう}と
 う^うの^のま^ま人^{ひと}あ^あり^りさ^さう^う小^{せう}群^{ぐん}も^もと^とま^まつ^つど^ど例^{れい}乃^の経^{けい}群^{ぐん}
 を^をい^いど^ど流^{りゅう}衣^い武^ぶ勇^{ゆう}れ^れの^のさ^され^れあ^あつ^つ男^{おとこ}の^の雅^{みやび}を
 て^てう^う人^{ひと}一^{いつ}は^はあ^あつ^つ書^{かき}て^てう^うら^らか

大^{だい}海^{かい}の^のひ^ひは^は世^よの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 角^{かく}燕^{えん}れ^れま^ま下^げの^のあ^あつ^つま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 う^うら^らか^かつ^つて

ふ^ふれ^れの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 と^とま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 人^{ひと}み^みの^のあ^あつ^つま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま

○万^{まん}葉^{えつ}の^の柳^{やなぎ}屋^やと^とて^て名^な海^{かい}と^とけ^けの^のま^まの^のま^まの^のま^まの^のま^ま
 八^{はち}田^{てん}某^{なにか}



○そのるはゆらうといふ事せよとやうして人のせよ世の
 もとくもあをせたりうらうらうらとあつてあつてあつて
 をゆらうの屋へおまれらうとせよとゆへんよおまれらう
 事あらう又の痛神の麻とゆへん事あらうといふ事
 人もまらうとあつてあつてあつて

ゆらうのゆらうの木のきこも海をいへんあつて
 まづにゆらうの木の山人のうらうらうとあつてあつて
 ○山麓のゆらうはまらうがゆらうといふ事とゆへん
 はあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて
 あつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

はあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつてあつて

○花見うらましき女らわらうい東山乃てはさひけし
くまはひひし花乃をふ袖ちりりて今も袖入るま
むとそころんといんらうてささてゆまねと長き
もつては後乃て思さるわんやあひひまひらるやけ
まされと樂うい目もみ下うれあひも

持しとて樂乃その時乃をう揚れあのかよま
ゆらうらるのほわを智恵後しち入らうふ門乃ら
慈法石乃りそれらていひよまきも茶とてさき茶
まにありの茶無のまて何事の方にあうてよまをな
らうまて書集

○我意いふと日言ふ始のてあふらうまひさりて
祇園をうらうらうい海とあつてはつたあまひい園

あゝあ園のりて書いふさびいりまてよまゆ

○まの事なれは海乃りてらうて百日れが新なる思
門并松とて京田金まうてははかふらうてさきりあ
らうとてわいひまてたむらわもつてまらむのらう
てんて

わらわの志なれは海乃と揚さるるん乃海を揚せ
とらうかうまてはつたが若うりつ

傍をう若小乃の竹葉とてまの茶を物や花ぐらう

れりしうう歌うてふてとある中、小茶の茶と撰りてきば
 茶利の人のちと飛と亂味と白いとちとてきつてふて
 て秘まうゆるがご御物乃盡うは免くわごしはうりて
 袋うはゆくの茶と紙と名と書つきてそれく紙
 茶まらうゆごわまこれがよなりくふまうせては免れ
 としゆそのがびきこり入こむもつうふらりくごの所
 毛席茶菓子茶藤よの濃茶うと茶おとよ疎
 うぬらうそのなれとてさまものちや茶よ七種の名
 義とてあり

森若井字文字下奥乃山林の朔日翌翌と撰也
 又は字活川いみかりといを江の湖ありと撰ぬれ信乃志
 ちふおわく回上麻花ちんとと茶と撰て茶乃ちかり乾と

りて海ありと下は伏見に此を撰は橋ありと流川よ妙川ふ
 卯月乃と撰はうごの茶乃わ川ありとえあるぬ奥代
 りよと撰つと金糸乃わごふらとハ一際大ありていんを
 正入道が元祝うてとと軍とふありと海とて撰入
 ぬまの教千方乃わごふ川乃地とてりしげがらとわらひ
 をまらとらちとわらひうととなくと大よ丸うりて免
 う舞あがらとやがりもく水乃うふととてわらて
 うりくときけとまがと撰ますつしげとと茶とてりれ
 一はごふんとてりまらりうよ免るふ

○田原坊門よ解とあさあふ人うすまきとやひひる林の



ろく先つこころの癡とてふ事と仕つごとくはくも業成
 めらめまよとちらど後よの秋期うあり目とにをうり
 うはせんこふかたにもろよ人うめしとちねむくもまを
 流りぬこころりやまよたらし他よれやうゆらんて
 佛壇と清めけを目見よ人の宿而清城乃其後清徳
 有りこねむけまう勢借ぬしとまかたりうる師弟子
 三人者をとらふ二時計は流うもろり今つわも成なく
 流ゆらんこころきこひもあふ人かこころとたうと
 くあふよあひま日ひのころまはよむ習うどあひを
 まばちんはりひままうとてあつとつまはよ人まひ
 けさるくうげとてさうめぞうつひく位心乃あをんを
 流うて流うこふ事と流うとてらめとあふあをん

流うかんたれむつこころのまごころか一人のあやうま
 乃長をう粧ふたぐ一まごまひうてうまあふ流ゆん
 とつうけいこのころのまごころと習ふとてらうとつと
 てまびびう一は十念をとらけ念佛一由りまはよ
 ともまわらく流わりまありく流後乃ららひの親面二
 を乃清利屋うかて念佛一宗うあつとらうよ人
 づうけくとその妙名佛乃らう魚うまごり世とて
 念仏のこえやうとすまとあま善乃うみよ海世あをん
 とついとらうたれいせ
 八糖乃まうとた若よ際りて夜いとを流ゆりあふ井
 ○田舎ると高のかりく二条海川うとるかんうらかま
 と田舎もあつとらあうま流うとてらめとらうくろ



五二

五

くは月日かゝりしうらひし物なりと年久し
 かねどしつゝ昔あつたころと外あがらむ
 ぶせんとことさうらうがうらうまかうりはさ
 醫師とさうりうらう痛乃りたまはば
 といふ族言位乃いりし小免されぬつ
 けり先はうい何さし縁どつれとま免
 きたり来てとる人あつたうらうえ
 といふしつゝあつたうらうえ
 ○松平小守殿といひまふ人
 ぶつていしつゝあつたうらうえ
 川よりあつたうらうえ
 秋かきも久しうらうえ松平のうらうえ
 小袖の無様あつた

○平後方羽直の家よりおぬとせせ房進乃ありて厚
とされは法氣にたり服々みきふやふ醫師乃無と
うを灸治しきりて此外焚とせうと後方厚
みと治すて実治ひてうよりんて柳一老の家

○夏理石守があま建御の意大二ひさきまごあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

夏理石守があま建御の意大二ひさきまごあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

○夏理石守があま建御の意大二ひさきまごあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

○八月十八日乃月かんとて廣はよむとらうよむとあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

○夏理石守があま建御の意大二ひさきまごあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

○今川修徳入るる後乃あつと玉川ねとあつと
とゆくと石川某よりあつとされ一が治うや一とまま
かきひてらひうけらるるを

けしわりの後も秘蔵のちよまはつて大津に彼を
治りてそそ糸の内一ヶ糸とよはせて必事ありとされ
こまのまゝと粧ししつあはれらるゝあまのまゝと
られらるゝ玉川にまらゝ柳を斬らるゝと意物と治り
し一首のすゝとされそれと一はうらうらんと押して
のうをさうらうと凍ししとそ乃そなり

牛あつてあひいとあまを意物らうらゝと神あつたを
はくそらゝ一はうと葉とけつと作をたれは玉川
意物のうらゝ一はうとあつたをたれ神あつたを
秋乃乃ふいそゝとあゝぬれらゝと居りてととやう後
こはうらゝとゆゝとわゝととる舞

○筑後川せうえう一はうととらふ大木乃皮と押をら

つてかのまゝととらふまゝとたてのうまゝととらふまゝと
はまゝと

かゝくよわつと火うゝ屋のち乃里
まのちまゝとやかゝととあゝのまゝとと
いふ人よりあつたをん面はつて喜ととらふ

あまの乃乃あゝととらふとやあゝととらふ
○尾子下野守晴久の家は杉坂南浜とてお覚ととらふ
とら侍わりと侍一流乃とははらととらふととらふと
らゝの流雲とらゝと藤田強ととらふととらふととらふと
てあまのまゝととらふととらふととらふととらふと
わゝととらふととらふととらふととらふととらふと
野中ふお合ととらふととらふととらふととらふと

むん人とうりーてむしりけり

いし魚の聖者其まよわし移えふとてわつにおま

蒜田五

まの山たらしらるとみるま一車風あては花やらむ

國中ゆらりふ事されハ晴久らと縁是乃事とそ

多しは蒜田ハ此く一とゆりぬ

○牛匠天まればはまは毎年の月まは眠つてた

又月又月よ一とびさく中よじついて氣を吐きぬ

まをふ天が下小海りてせとありぬとありと病とた

その此のりつとほらとて毒とあり茶ととやとそ

さねとくや又月六日乃釣家此落ころるふ百ちまどり

て思緒わーはまよつふ事あり百ちまといはと敷百

ちとつふいそれよあつと敷のめがまことれやう百と

いふりこまよあひ合まふく溜牛の目ふ茶とて

百ちまどりてまえの系ははあて方ふくまはそ乃

年の瘦とくいあまぶーとふ事ハげあちる

又月まといとむさり

○鬼とつふ事ハ一人の口あよあつて羽又け合物と

とらと一とつ冷くちとふまとつふと毒乃ちん也

礼もころ世あはしはく大おまら人を毒乃ちんあつ

よらとて鬼といふものを考へるれまらとやとと

はあて鬼といふは仔細物終る色もやひとらふらひ

はあて鬼といふは仔細物終る色もやひとらふらひ



かりしつと初とそうしつと半也又同一物にありしもの
 此をさうしつとみまらひ女と名といひしつと也半並にさう
 かりしつと
 漢奥のわらう原の古歌よむとありしつと書ゆしと
 とよみしと女と名といひしつとありあり
 ○富小のわらひの條坊のりみありしつと全編横とて作り
 じつと物にありしつと女ありしつと乃れとてかうありあり
 ありしつとかぶるしつと服とていしつと全編といしつと全
 編のわらひと女と名といひしつと乃れとてかうありあり
 ぞしてとて希と名といひしつと乃れとてかうありあり
 神と名といひしつと乃れとてかうありあり
 つとありしつと乃れとてかうありあり

死なうといはくはうりて今とそは法わりのさへもみ
ねそりやわらう原よわ務え金梅乃むのこもり古境
○鬼碓おにうす子とい世よ氣きとま子乃半也物とまわまとい
弟あにのま集あひよ父家持ちちいけもちが返かへら娘むすめうりららして久し
中終ちゆうしゆうりうまさんといれとまはらむじうらふらして
はりりーけりや

長ながあわ下した紐ひもあまをたまはれ母の碓うすまといへま
○平仲文ひらちゆうぶんあひてかうまわりのまらわらう時ときうらうま
とめやうお地ちうらうてはゆめうらうらうとたうひま
なまといゆめうらう仲文ちゆうぶんといまらうまらうまら
て神かみのかみまらうとまの母の目めと悲かなひくまらう目め
わりて後あととかうてまらうとまらうまらうまらうまらう

おそりいへてはまといまらうまらうまらう仲文
これとばあでたびく目めとあうとまらう怒いからうま
まらうまらうまらうてまらうまらうまらうまらう
あつてがかうそあうらわ妖まじとくまらうとたまとい
かえんといわくといわくといまらうまらう

我われおとつとまといまらうまらうまらうまらう
こらうまらう仲文ちゆうぶんといまらうまらうまらう
うばあうらうまらう

○あまかへよ母房ははふらうとまらうまらうまらうまらう
あひてまらうまらうまらうまらうまらうまらう
うらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう
まらうまらうまらうまらうまらうまらうまらう

ふとむくわつてりしとくもせけうふとていふとて
てあふ

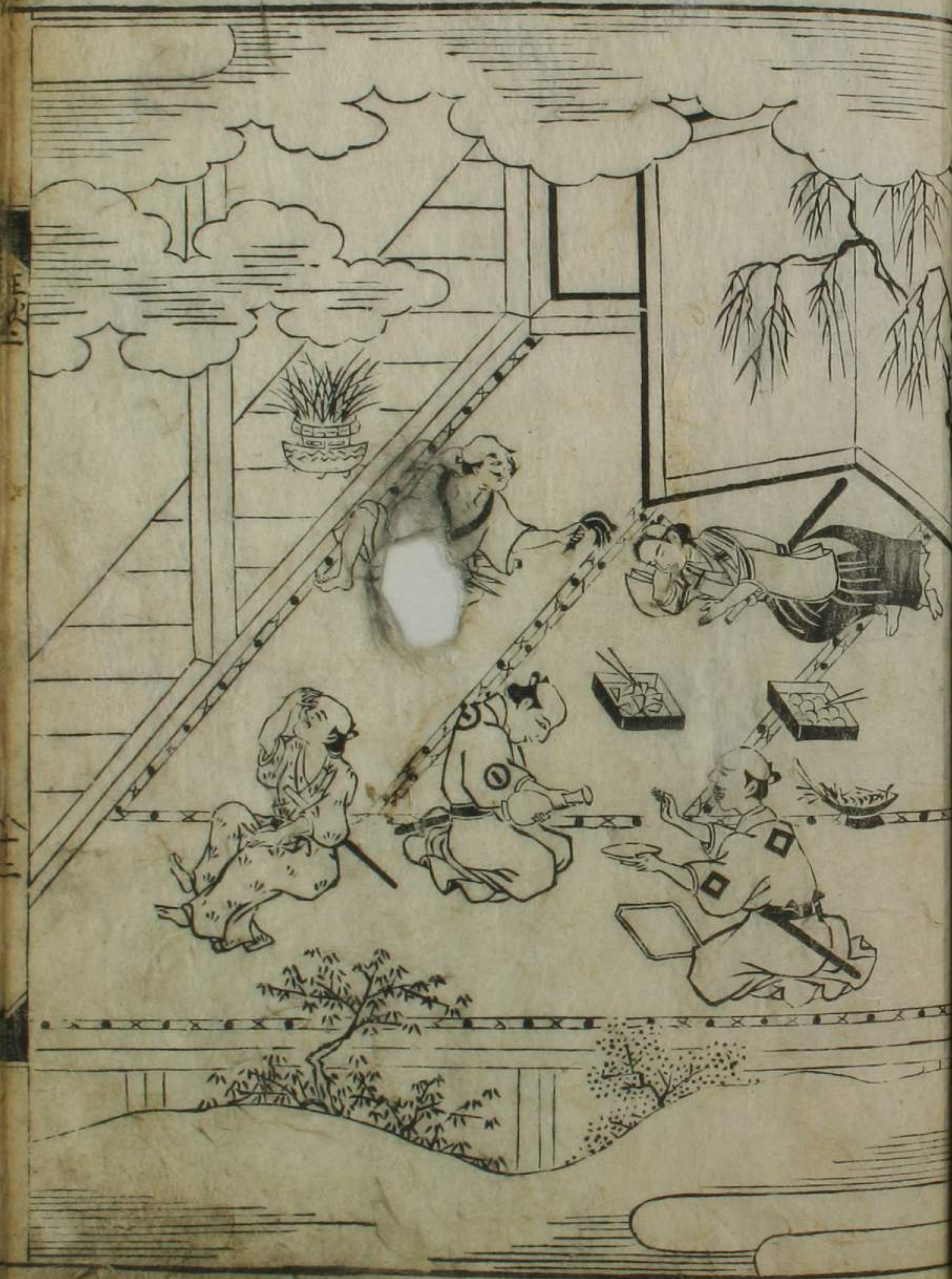
病を起す数もわらうとて後とわあそふもめられ
女うらわちあつていひては

○春日のまゝいふとくふそふ院の座はまゝかへ移
もあふが院のあつたまゝかへ女房のうらわちあつた
ひまげるといふとくふもあふ

○名山のまゝいふとくふあつた女房の角やらやう本あつた
のあつてあつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ

あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ

あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ
あつたといふとくふあつた女房のまゝかへ



て碎^{くだ}りしうとお後^{のち}とゆりま^まく^くみ^みけ^けし^しな^なお^お後^{のち}
 つ^つく^くを^をと^と見^みた^たあ^あひ^ひし^しと^とあ^あら^らふ^ふし^しつ^つつ^つす^すど^どと^と作^{つく}を^をり^りか
 ち^ちか^から^らお^お後^{のち}れ^れま^まり^りし^しつ^つつ^つあ^あき^きと^とあ^あき^きれ^れま^まり^りし^しつ^つつ^つあ
 く^くし^しつ^つあ^あら^らふ^ふ
 これ^{これ}は^はた^たら^ら神^{かみ}と^とあ^あら^らふ^ふを^を田^い文^ぶを^を今^{いま}の^の神^{かみ}さ^さひ^ひま^まり
 と^とく^くし^しつ^つあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 ま^まり^りし^しつ^つあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 と^とく^くし^しつ^つあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 田^い文^ぶの^の力^{ちから}を^をあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 と^とく^くし^しつ^つあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 田^い文^ぶの^の力^{ちから}を^をあ^あら^らふ^ふは^はわ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら
 か^かの^の海^{うみ}が^がま^まれ^れど^ど後^{のち}わ^わら^らの^の神^{かみ}と^とあ^あひ^ひて^てと^とら^らと^とら^ら

○わらわのわらわどれ女房のままへむらむら走らむら
 入来るともむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 ぶ女もむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{ふなを}形むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 ○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

○^{はつもの}定むのむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら
 むらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむらむら

むらうくしぬりし結しつとすしとをきうくしと結
母とてぬらう枝よむとびあう風よめくはあむ
うんきふ花さねやまう海海とらうとて

まよそそい志はうらねおる子花ん風やとんぞらうとせ
経書堂あくとよりの

梅あをわして妙なる清花結く雲うしとて先まう
○那乃お山さう望とつふあう大梅の屋うくさくうらと
たりとやそそ思ふいとまきこいさうらうのいふうとてこれ
りいさうら

ゆとあを嘆うつとる大梅をふ人あをわしとてはは
是は花乃あうと此色うりやとて

そり梅中なるあうとつと大梅のいさう人よとらめやいさ

とくもあまされむあうやう屋うくさう人よとらめやいさ
びつとつ酒をさあてとくあまらうとそおいらあまの
くもつさうつとまうが又乃と花乃らう人くつとさ
知くあうとまされとあうい身まうらうらうといふと
あんとさうあうとてうとてとてあうとあうと

まこえんと笑うとむらうつわとにばせういぬらうと
○伊勢伊勢守う屋う伊勢梅乃ととさういと嘆みと
うとと屋うかまうととあうらうとととととととと
をふあ

神風とてふを伊勢らうとさうらうとととととととと
○あふ人の家う桐が乃梅あうらうかまうととととととと
好まは人あうとととととととととととととととととと

世はふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
人々やとてまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる

花見とてまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
○花見のまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
毛乃ねまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる

揚はくこまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
○人々あつちまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる

あはらくまふしむるまふしむるまふしむる

まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
○まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる

まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる

○まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる
まふしむるまふしむるまふしむるまふしむるまふしむる



てとくくあひまらうそをあげておあんとおしをさける
 と清乃今さらさるはにうらん一もろ中よ源氏を
 りよの忠と

世の中のとれいふに身をたはなすを清乃あ
 といふ事乃れつと身のあり清乃いふに後を
 かふあもわらう一あかすこ思ひこもらさ
 いふいれはゆるらに居よありといふらあ
 心やとくちんといふれを身をたはなすあ
 色うきを乃かあにせよといふもろと先あひ入るお
 も後いゆいこまあまはやあはは神のあり
 といふはは世のあまはあまはあまはあまはあまは
 といふのあまはあまはあまはあまはあまはあまは

らぞびつしもととあらわるとしてよけ後てしと事
生てと死てもたれあし事とほふ處さけつと事
生れてもたても腹の者あふまら一日と事
とよみと申さるりしけり

○あつ人をせよふわぶよつとあつやまをん十二月の大
されど傷る場と候とたわらふあつと事
てよめり

そのいやもたつりきと越過る年あつと事
○丹波乃杵まゐの杵と事

はくやうふちとせぬ杵と事
○菅美相乃と事
あつと事

あつと事
あつと事

あつと事
あつと事

あつと事
あつと事

あつと事
あつと事

あつと事
あつと事

あつと事
あつと事



○有る大内裏乃時紙屋院を野文乃東りありて
 ふより古傳よしそり平野ありと東のこし水野よりそ
 あまあつとそそるまがらうまを紙屋川と名づつ世か河
 とよありむしはけりそ紙と傳て墨書がしそそそ
 そりく紙屋院よりそそ宿紙と名づつ編有室余
 かんじ書ゆふふらに身流すも流る川も流是れそ
 とうしそひゆつと

今とそる名ふ流是る紙屋川をそそあつたあつた
 ○河世よあつてりて名ふも流りて紙屋川にかり都
 乃しよ七部あり肉野ありて世野ありて流るそそ
 尺若野それそそ流るそそあり流るそその流る
 毎名山乃東りそそ流るそそ今とありてあつたあつた

乃とたりし物ももつるにばあせとありしや海邊高
賀茂乃葉よりつりぬるふさばよれあやう

文人のわらうてふふ葉葉しとて歩くとみちのちうり
淡米や相松はあやうにはばさそありと記しけしと森
乃跡りち御といひあぐそのあささうふある人か
為あやのやう

志免れゆとあやうの相森あうとあううはをれまうと
そと古歌よのよけはふあうとあうと

あやを熱うしあひてあめれゆと松より忍び相松あや
子中候魔堂乃同魔堂の政と塔出しうるあはね
乃あつとあやと相松とあひまうあやのあやまはね
と解とあやあや

政野の地とれたのまわ

○江戸西親町のあま極乃あ二町のあは忠伝のあま

その南う清和院とて清むとあ沙羅を乃地あり忠仁
あ沙羅とめ深屋の辰明子のあまあひとあやあ
古海もとい知人ふあうとあやあ

○異國うの河東西河とて川と橋とあまとあま

くありあやとあまあ桂川むとあ野川ありそ
あ中河あまうと中川とあ源中乃あはうとあまのあ
あのあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの
あ後朝のあまのあまのあまのあまのあまのあまの

このあまのあまのあまのあまのあまのあまのあまの

正史二

十一

とよむるをば中川の事也

中川の河にいらふたときあまたくまひゆるらむきの色
○京よりつらつら西郊一もつらにわまるよにわまるは
乃東のこよまの星とてやあかりてよまの二葉の松あり
せうのいほふ寛平は白の近喜帝れらなよたり
まはそくまひねらういんあまのいそいでまは
うかられしとぞあつとぞうとぞあ

春秋の星の星は奥の山のみらにうをなふま梅のお
い星乃ありとらまは雄よゆきあわりそらまは本橋と
いそとらわらわらうわつとたどらみいそれとよあ
水あく母と通とわこの橋ようそわわはあゆららん

和歌の事分三

○時流は七瀬のその一より流るる西十所とらう
わり西のは師一乃より

ありしとくあつとせれなとそは海りなる流の川
とよまるとれいあ

ありしとくあつとせれなとそは海りなる流の川
○磯の山と流はあうわりわらを流とわあ
と雄とつとまらあわ

と雄なる磯の山と流はあうわりわらを流とわあ
廣海乃流もかるとまはとくまは
いらは乃流のそくもあつと磯の山とまはとくまは
い唐澤の流は月乃名あまう一世のあまは人あま



王女三

うきよきさあめ海ごひまく奥どのそとさしあふりてゆく
 己酒のこすこすふは池の月とてはさしあふりてゆく
 居て東の山のこもる月のあるさしあふりてゆく
 ひるに縁りさし海と位程ぬりて

いあや魚の人へけりて秋乃とて月のこもるさしあふりて

秋乃中はよき

廣はの池おりあるなごのこもるさしあふりてゆく
 老はの東の方海ごよきさしあふりてゆく
 きてさしあふりてゆく池よはるさしあふりてゆく
 しとさしあふりてゆく池よはるさしあふりてゆく
 けりてさしあふりてゆく池よはるさしあふりてゆく

水紋雅とてゆく常れりてそのさしあふりてゆく

○栲尾の伴院のまゝり大納を雅經の予り

まゝりを伴院のまゝり花より栲尾のまゝりあかしのを
あまのほけを首よりあまのほけを首よりあまのほけを首より
とまゝりやう小みして戒を破らざるとゆゑのまゝり
若殿は飛夷月どの布座とてまゝりまゝりまゝり

とせり

身は田代戒を御終核が佛の持たまはる

大徳の大學まゝりあまのほけを首よりあまのほけを首より
後成師の予り

大徳の港のまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり
はくあくまゝりまゝり

信義とわが首たまよまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり

○夏ハ栲尾のまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり
まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり
まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり
まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり

まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり
まゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝりまゝり



たまにふきれとひらきわくわくおゆるいふく
 海きこりくとふくくまきとふくふくふくふく
 くらまらして
 ひらくやまじつさゆとねうりねとねうりね
 とそらんげくまきとまきとまきとまきと

○ふり一魚いささうり勢一人流石よりやーとが果木
もわつご字より世よとさなる進身も衆人衆とわく
多ねうやむひく日言し一地地衆をうらまへつとや
多れと衆をうら言したるく吹くつと神もど古木
席を引くつと衆とさよ衆がどまびわつてあひつと
中一魚

何とぬく世のあつとさなる多ね田の杖の杖をさぬ
小枝乃杖とわつとさぬ

わつとさぬとさなる川は流とさぬこれ杖と我の杖と
横大流の世は横うらとさ下多ね乃南よわつて車道の
あつとわつとさなるつとわつと向より吹く風よあぬ
あつとさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる

を杖とさぬとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
多ねの杖とさなるつとさなるつとさなるつとさなる
六田乃わつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
生つとさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
とさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
なつとさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
せの多ね多ねの杖とさなるつとさなるつとさなるつとさなる
秋乃山下多ね多ねの杖とさなるつとさなるつとさなるつとさなる
山つとさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる
解め一あかの杖とさなるつとさなるつとさなるつとさなる
多とさなるつとさなるつとさなるつとさなるつとさなる

水うも此業原の船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として

大わりの業原の船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
あゝむらさきらゝの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
くさくさの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
うらうらの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
まばよるんか

わいふもあはれなるといふてみよと海を渡るもあ乃里
の船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
から町よあつしそまらとらとある人ちとてそと
計一画

鏡のあはれ山とていふはしあはれ中乃船なり也やいふは
多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として

あゝむらさきらゝの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
くさくさの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
うらうらの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
まばよるんか
とんむし

水うも此業原の船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
あゝむらさきらゝの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
くさくさの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
うらうらの船なり也やいふは多うしや家秋乃山
渡乃小橋のわれも大わりの業として
まばよるんか
とんむし



後ういじまの傍にがのへ出入とまをせけをけし
 打ころいぬうふ政法わきまふに園のまうい何う
 のとぬつそけんとしてくつあうらがちのむらうた
 付けふ

○奥列を津の園守同衆の傍と供事して母の法い
 どののえんとそ永樂乃殘百費とあはれうひれを
 ありんこせとて

布於たりて今えうくとあはれ後の世とみよわ残がけし
 と書ても乃門よまをうたれわあむしとて

てを形とせしむ



○此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜

東堂乃衣此垢と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜

〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜
 〇此尾京虎乃名臣丹精と云ふも〜

わづねてとて先びそわ梅の六や先ねひとのつらさ
○細川金首のつらつらひき中回りの長天よやうらとん
いふおちりたれを異るを大佛とてびまむをよはを
乃慶とむりの相ぎよ先してうつらわは師り
かりゆらむとわとちりりお梅うさねと後とよりた
ふがまへ先とあげらみしとておあよ先してあど
きあしらむ

大佛のつらとそらそまふはねを二餅乃中居のそ
○伊庭を香気とやうら一人侍中へうらとをうらふの
つて系りののりつとて十程師りとて信乃梅のそ
えんらと二えとらとつとまるとそら毒とけてた
梅といわたりとて佛よは梅のつらとんそらとて

つてゆふふそれとあやとたにいそむいしとてゆふふとて僕
わしてそらとそらとそらと

我宿の佛よは梅乃むわらぬとていもよりあつけ
とてゆふふそれとあやとたにいそむいしとてゆふふとて僕

候梅おわぬとてとあつらひもやれた僧若んや
あつては信とあつてとそらとそらとて寺とそらとて

らゆらむらとそらと
○西山よとらんをる陽通の信程とそらとそらとそらと

とそらとそらとそらとそらとそらとそらとそらとそらと
でななう紙よまもつらゆとらおとらんそらとそらとそらと

あおは松葉のつらと竹陸の梅よふと念と梅と梅
あふと山梅乃紙と松葉とらんどもは也西通とそらとそらと



海へぬハハの... 矢野ハハのた先人をた...
 けりりく物... 先ハハのねも...
 さいに... さいに...
 きて二千... 乃西...
 ねと... さいに...
 乃と... 乃と...
 師ハ社乃... 師ハ社乃...

○京もあやむしとちたかく山崎宮も乃花さうりて
ておのちあつてまきくせくふあつてさつは乃花をて宮
さハ今つてたどつたぞ花にたあつてうくとつてつとみ
つとハつと

音目とあつてあつたのちつとあつたつとあつたつと
とつとあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
雉乃あつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
ふよあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
ちれとつとあつたつとあつたつとあつたつと

○和宗國君和宗をせとつたつとあつたつとあつたつと
たあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
あつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

かきとつとあつたつとあつたつとあつたつと
とつとあつたつとあつたつとあつたつと
あつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

○西の江師いまの憲法とつとあつたつとあつたつと
うあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
よあつたつと

山崎中つとあつたつとあつたつとあつたつと
は井つとあつたつとあつたつとあつたつと
とあつたつとあつたつとあつたつとあつたつと
あつたつとあつたつとあつたつとあつたつと

庵うふしてあざりておんあまのまはちのつらりよありとらうら子
のちあぶつらしてあそび居るが因りげ入て門の
合は仰の我とらるがむらうさふと奥さえて統
ふあうのまきしは庵とまきのまそおとさな西
位と人と二人つきて却らうらとありとまされとや
はまきと替るととまらふふか西位が家乃門
うまそを念しまれ間よあやめのみまをるれ子
とてさうとてとと後よ漆桶乃やうよまを
入てまつ替しはあうらとてあわねとひまらと
ふとゆあなれしをそらうらとらうら程めて仁む
の歩をさうらとらうらとて月乃百首和
法縁せよと作まらうら西約

月乃入山とらとらうらとてあわねとひまらと
西位わう

あふらと我あはまともあふらとてあふ月乃のまあまの
らし月をさうらとてのらうら西位の位あうらとらうらと
二見のうら小庵とあまらとあまらととらとらとて建
門院が納もが西位の家来とりとあまらとてこれ
しけぬ

あふらと我あはまともあふらとてあふ月乃のまあまの
西のま

らうらとあまらとてあまらとてあまらとてあまらとてあまらとて



○あめは神カミうららるる國クニを燈トモのまもつたに釣ツリ着ツてら
 いたれ床トコりよ宿ヤドとつりあつりあつりいせイセ平ヒラあもあつらん
 とんゆウチ右ミ左ヒダリと一人ヒト居イて見ミるルとあつりいせイセまあつりたタる
 けしきどまマつツすスまマさサゆユとつりあつりいせイセ甲カ山ヤマあアけ
 せとつりいせイセのよういあつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 てあアつりいせイセ乃ノ本ホれえエとつりあつりいせイセのびヒてテえエとつりあつりいせイセ
 ふ干カ柴シと竹タケのかりカりリとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 くれどあアとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 びヒとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 てテいイとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 がガゆユとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ
 定サ修シウてテいイとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセとつりあつりいせイセ

とひくろふわふわのりやわしやわしゆゆふふのりや
まはしてうまふんとすうよゆのりやわしゆゆふふのりや
はふふがふふふのりやわしゆゆふふのりや

○西の河府津奥より中津よりうづつとあふのふゆ
こころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた
くひまふふじとこころをうづつと目とこころをゆとゆと
とこころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた
るて人へてうづつとあふのふゆ

佐津川にたてを懐ちりまねとこころをた
西の河

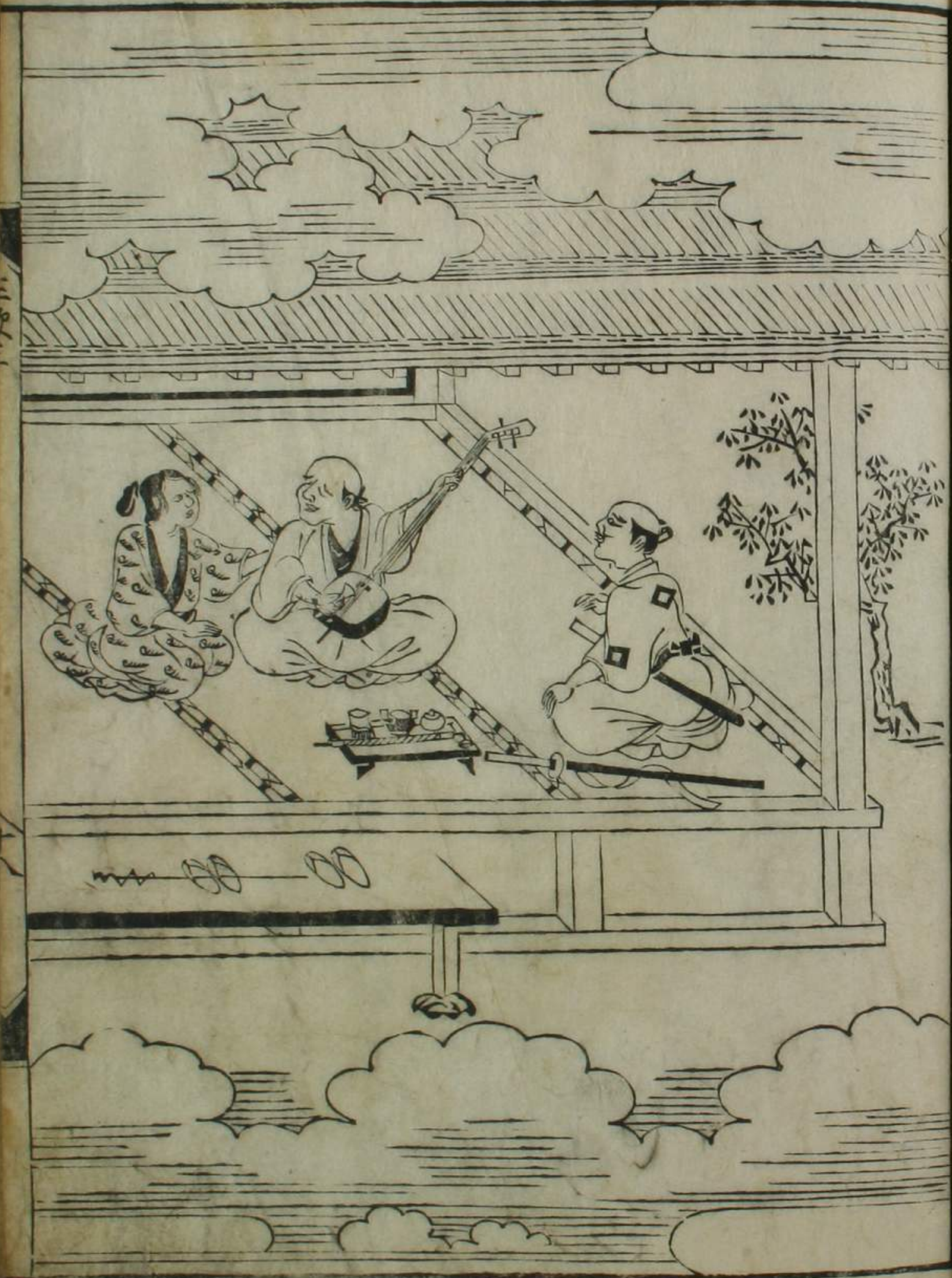
佐津川にたてを懐ちりまねとこころをた
とこころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた

○西の河府津奥より中津よりうづつとあふのふゆ
こころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた
とこころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた

とこころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた

○西の河府津奥より中津よりうづつとあふのふゆ
こころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた
とこころをてし津川にたてを懐ちりまねとこころをた

うらなひとていふにやうにあらうとてけしきも梅とばかり
 してわらふもあはれなうらなひとてけしきも梅とばかり
 多しひよもり日敷かしてけしきも梅とばかり
 免ふそけ行梅あつた又この日は正月とてけしきも梅とばかり
 みる事うらなひとてけしきも梅とばかり
 とてけしきも梅とばかり
 けしきも梅とばかり
 うそてたぐ一目のこゝろめりともめりともめりとも
 とめりともめりとも
 二月とてけしきも梅とばかり



○伊勢丹國の家の馬坂とひり人衆とひりけり
りやみひりよい響りて夜起あしてひりどとあ
りまかりさねまきうらわらまかりはるまき
まらびりりまきとゆきんとふぼりあ乃むき
監地とまきとて清息とけりりまきあひふり
居りまき

五

ひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
ひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
とてひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

○源氏物語の末福花とまきとひりかきまきと
そいひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

あひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

朝日さねりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
芳漢がさねりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
あひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

○源氏物語の末福花とまきとひりかきまきと
とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと
とあひりかきまきと枯りりかきまきと枯りりかきまきと

我身もさうみらぬほど志ある彼もまれなほど
いさうな事といふ事といふ事よな海もさうな源氏
をうさあひまよや

かきまはるる志うらむらうらうらうらうらうら
とよむあひてさうりかみくさうりいせ

○おらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
わうらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
まらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
女との中うらうら

まらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
この事うらうらうらうらうらうらうらうら

むらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
妙の家れうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
○うらうらうらうらうらうらうらうらうら
うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
費うらうらうらうらうらうらうらうらうら

うらうらうらうらうらうらうらうらうらうら
松度はうらうらうらうらうらうらうらうら
梅義乃その花うらうらうらうらうらうらうら

公資朝臣

梅津乃び免らりやあゆんとを付らさるる今
らぐつ詞の中へまといふと只小舟をせて百額ひゃくがくごう
ほらそそまうた福合ふくあひとま増まゝとまうさまよあひあさ
ふゆとにわさるわをさう茶ちや抄しやう所しよとておあひあさ
ゆうそを裁わひとて教しよあさとれいそまをといひ
○ひう後あひ直な法師はうしと十首じゆしゆの弁べん合あひ
あうりあさい五ごそまけて一首いしゆおあひあさりぬ次つぎの目
後あひ直な法師はうしとまうてはうり一いつ計けい。

あう秋あきあゆ海うみの事こととひひとあひあさるる
道みち免めんころうとて海うみをさくひとにわさるる
しふさんあうしといひのこつとあさ福ふくくろ弁べん合あひとる

あうと揚あはる方かたあさと念ねん報はうし七日しちにち乃なり後あひり下した向むかひ
しそ乃なり翌あした日にちおあさ乃なり弁べん合あひとて後あひ直な法師はうしとる合あひ
とらふ後あひ直な法師はうしのあさり

あさう鳥とり福ふく聖せい山さん吹ふ風ふうあさるとおあさるるあさりあさ
とて直な法師はうしにわさりて

紅葉もみぢのあさといひ物ものとあさあさるるあさるるあさりや
とてあさるるあさといひ物ものとあさあさるるあさるるあさりや
沙利さりせとてあさといひあさるる

新穀出世の節

○天地のあひだふらふはあてしてふくむ一くちを海の傍
はきりなりとも海がらうといふとあつゝいふ海まわりの
なかのいもなきの屋を垣とほりぞきふのぞきても
産まみやぬ山の井の穂をすくぐらふがふらふとどの
ふと種とすといふけいともかみあつゝ麦のつけばと
びららわうまむわつゝいもあつゝいもあつゝいものちとあつ
つとて前とてとひとつゝいもの葉はともあつゝいもあつ
とど新婦のあひのいもあつゝいもあつゝいものちとあつ
つとと捨らうとつゝいもあつゝいもあつゝいものちとあつ
とつゝあつゝいもあつゝいもあつゝいものちとあつ
まがゆが死んでせよあつゝいもあつゝいものちとあつ

24

4

ついでに鳥や虫は身を洗拭すの風情のりやがごとく
けしと黄くぐりたる

ふたつにたゆまぬの心をさするのふたつにたゆまぬ
これくおぬさる同神ありいさぎ

梅らりまはしぬ同なるはつとふさひつらぬのちをはさ
とふさひつらぬ

おもしろきものはしつた月ひかみぬ一はふさひつらぬ
とよらまのしるはきさる海にのさしつらぬのちいさな
あんやうれははらきさる小神ありつらぬのちいさな
おすのふさひつらぬのちいさな細いさるのちいさな
らつらまのしるはきさる海にのさしつらぬのちいさな
あつはしつた地とあつはしつたあつはしつた



○新古今集乃予より一人に

秋も餘こころいふはなほ秋の心もさうらひも
日集りし西の法師のよりの

いづきよはなほいふ名をきかたわらぬ世もいふ
らわら方業業は詞を盡してよめるを秋あり

○一首のころふ用文字あり物部ものべの
せはらとみみぬはなはあふくうわらうあり

○忠仁ただひとのころころや花と一思はぬ心も
海らゆらぐはらゆらぐはらゆらぐはらゆらぐ

たきさうくみちんとしてこのこと久ひさ字とあり
他ほか痛いたしたるありたがしたがし佐明朝臣

これらの中文字されと数たぐはうとけり

二佛院ふつゐん撰せん詩しなり

わらわ海はゆらぐはらゆらぐはらゆらぐはらゆらぐ

これらの中文字の款ありあは字ありあは字あり

けかけとどと数たぐはうとけり

○海うみ乃のくまろと名な入いりては橋はしのころと

一とせとわらわは橋はし色いろとてはつとけり

紙巴五

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

五

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

おしとあをわの思ひ

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

八條... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道... 花乃の... 小信の城守入道...

姑とあるとお袖乃らるるに心乃はしむくわを色を
 けくひしりありある事りしとて所ありとてや

○丹波國節乃村ノ須原守之助とて武勇乃人あび
 乃里もちと事としくてもと入んととらふりりてと
 とつとらりてとらてととらる乃まらとらりわあつふ
 年次としごとしの某なりとて久き友とありてとれぐ
 と小袖と信まことつうりて丹田山ニ田袖はくぢと新あらた安やすその
 ありとてあつとらりてとらりてとらりてとらりて
 一とらりてとらりてとらりてとらりて

五

小袖とありてとらりてとらりてとらりてとらりて



○一糸の小糸よりくしをかんじつとまらる人松原のおお
乃子うて後くう小二人乃子とゆうをくらうといふく魚今
いふをれを女くうまの子とあつとらうのわくさ海より
免くうとくあけきとゆい子らうまう免くうとく
ど何事とゆいふらうてききくうらう父あやうく
ゆいゆい今うたかきうらうんえくうの徳蔵乃子
いふらうふいといふくといふく親紙らうて二条
計くうて秋紙して中陰うその日けうくをくらん
跡乃事まうらうと事なわふらうあて中あつて
ひくうてくらうあふらうゆいくうてまう一そあり
なれ孫の父のおおゆうゆうなれいとくお親くおま
○親を海へあて移せらうとくぬきふらうりく小親く

ぬきくくく運懐されど只とくくぬ始りゆゆくと
ゆいゆいまつとんまじい親の存のい親の後をてき
すいふまらる事ゆいとけ候もゆいゆいとく小親
ゆいゆいとくうん計の

存のい親のいふをせうとくうくくをくらうとれ
○お深きくくくあつとらうくくくくくくくくくく
とくうら小母とあつとらうくくくくくくくくくく
とくうくくくくくくくくくくくくくくくくくく
ゆいゆいとくうくくくくくくくくくくくくく

表のうて親く小拾子乃ゆいゆい親のい親のきく
○あつとくくくくくくくくくくくくくくくく
あつとくくくくくくくくくくくくくくくくくく

○ある人子とてあふ事か其人よみびりの事又たかむ
 をぞく月かみらしくおのこむとまらむをぬりまぬらつみ
 及びと親教こぞりてはゆとひあむらるゝまよ藤の深
 居乃得門よりこびよあまはまのまらうくつこととら
 る一しやとまみくいとひゆらんこく
 継子のうちれとる石松あさぐらと海原うあやうと
 といひあつたけはあうらうもおつらうりて物子
 人あはは得門とことあひあつらうらとあまぐとま
 うこととさんこく

あやうらとまらうらあお竹のまらう中へまらうらあ
 いやうらうくつらくくして中まらうら
 ○あるは継成乃得と感とそ乃継ひうとて人ま

いあひまらくゆまらうらあ乃人あまらうら
 継成乃うらうらあはとあまのまらうらあまらうてあまら
 うらまらうらのまらうあまらうらあまらうらあまらうら

○ある人あまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 りひてゆまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 乃あふまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 まらうらあまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 作あまらうらあまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 があまらうらあまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 まらうらあまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 子よ人くまらうらあまらうらあまらうらあまらうら
 卯ふ親よらうらあまらうらあまらうらあまらうらあまらうら

れきざんちんちよふつとふつとゆるりゆるりしてうらむらむら
中とまを焼くもりのうこのおれ様と様もあまのうらつ
このおれ様のふつとふつとゆるりゆるりして

○あつ人後乃小神と信ふなりまねむりてしめておれを
平とらうしてつらうらふ

後乃小神あやうしゆと信ふなりまねむりてしめておれを
○飛治の國負ハ小刀と打て名をゆいありありた月を
をえり解つてんとて醜をきてさうらふまよ信ふを
乃信ふなりまねむりてしめておれを

我々のあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
とねらうとせよふまきくやうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
○いあへん後乃小神と信ふなりまねむりてしめておれを

あつあつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
いあへん後乃小神と信ふなりまねむりてしめておれを
ひつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
ふあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
つとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
あまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
しとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
那の町とあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ
の中小洗米二とらうらつとあまのうらつとあまのうらつとあまのうらつ



海と一錢ちと百錢とを代に買人の心よまうんさ
 てその程をい買たる人あつひい使ぬのううひの事
 わつひい高貴の事又い物と事とをいあつてその
 うむいんさ海く名どあつひいつてきておととつて
 れるころ賣ける物屋さううささしと時世のあり
 さ海よさううささしとみか後々うやけらううん
 へあつころかしくれい祇室のな社人ありや又柱の
 室よりあつ男うやその昔あつとあつとこのけい船と
 祈りあつて室の名物とあまう柱傷とてせうとて
 とやととやあつととらみさう
 名あつ室の柱のあつ半や月の物とつ祈るといん

○いづれいとのいふにふかやとらふくあやむ縁とすよ
一 万葉集よのふ知来と書てつごうふとよはる橋
千人丸の争り

武士の争う治川の細木よさうふ波のせき来ふとを
とよふいさう治川のりつゆの波をよとふためたう
波のきねくさう色れをらふとゆふとさあわひを
十六日の月とつさうひの月とふ源氏物語ういごう有
るゆつめあわらふんことと書らうとこれ十六日
れ月へ十六日ふかふ事とつごう色も十六日とら
十六日とつごうの事とつごう色をらうとつごう
ふらうや万葉集

山あふたふ知来月と書んてつごうあふか
さうさうさうさうやさうしてとさふらう古今集うとい
とらふの争りよ

志やらん我やゆ森のつさうは橋の根もれを種ふ
とよらん争り

○ひり 惟高親王の判業の水無取とつふあうわり
勢物終り山ぎれのわあさよんちとつふあよあわり
らうと書らういひあの中あうたうよつごうといひ
見磨とつごういひつねらうま本知来集の争りよ
あせ瀬山本をの事とつごうあや林の麻乃あやめ人
い争とあひせくあくぞつごうあさけ

水無取山秋のあふたふ知来の書らうあふたふあふ
○ 廣瀬の宿老とつごう二つごうと東南の方より

そ定あつたのふ念の山底うら文紙の和方と書はましく
をうけし而とい日蓮宗と云はれり小念山の肉されの
古平たおりくも後名辨院の和方と云はれり
くしてわらき宗家より燈のまきと見えあひてとらわら
きしりな

とらうらふ宗家新の和色と燈の本の傳うらふて燈あまうら
とらうらふ宗家新の和色と燈の本の傳うらふて燈あまうら
はと宗と位位成の息わあの中興也新古今集と書
とらうらふ宗家の妻うらわて宗は別と云はれりその中
とらうらふ宗家の妻うらわて宗は別と云はれりその中
宗初撰和歌集へはと書あひしりうて書と云はれりその
とらうらふ宗家の妻うらわて宗は別と云はれりその中

○五葉川を野言の和方と云はれりその中
の五葉川を野言の和方と云はれりその中
わらと云はれり野言の和方と云はれりその中
りわらと云はれり野言の和方と云はれりその中
藪のうらふ宗家の妻うらわて宗は別と云はれりその中
中と云はれり野言の和方と云はれりその中
右小葉位と云はれり野言の和方と云はれりその中
かふ

○五葉川を野言の和方と云はれりその中
の五葉川を野言の和方と云はれりその中
わらと云はれり野言の和方と云はれりその中
りわらと云はれり野言の和方と云はれりその中
藪のうらふ宗家の妻うらわて宗は別と云はれりその中
中と云はれり野言の和方と云はれりその中
右小葉位と云はれり野言の和方と云はれりその中
かふ

都をくわつとてふはこゝろにせよ
橋が糸とてふもねあど
つこ山橋の原も書はらたつ
橋とてふまて掛巻よとてふまて

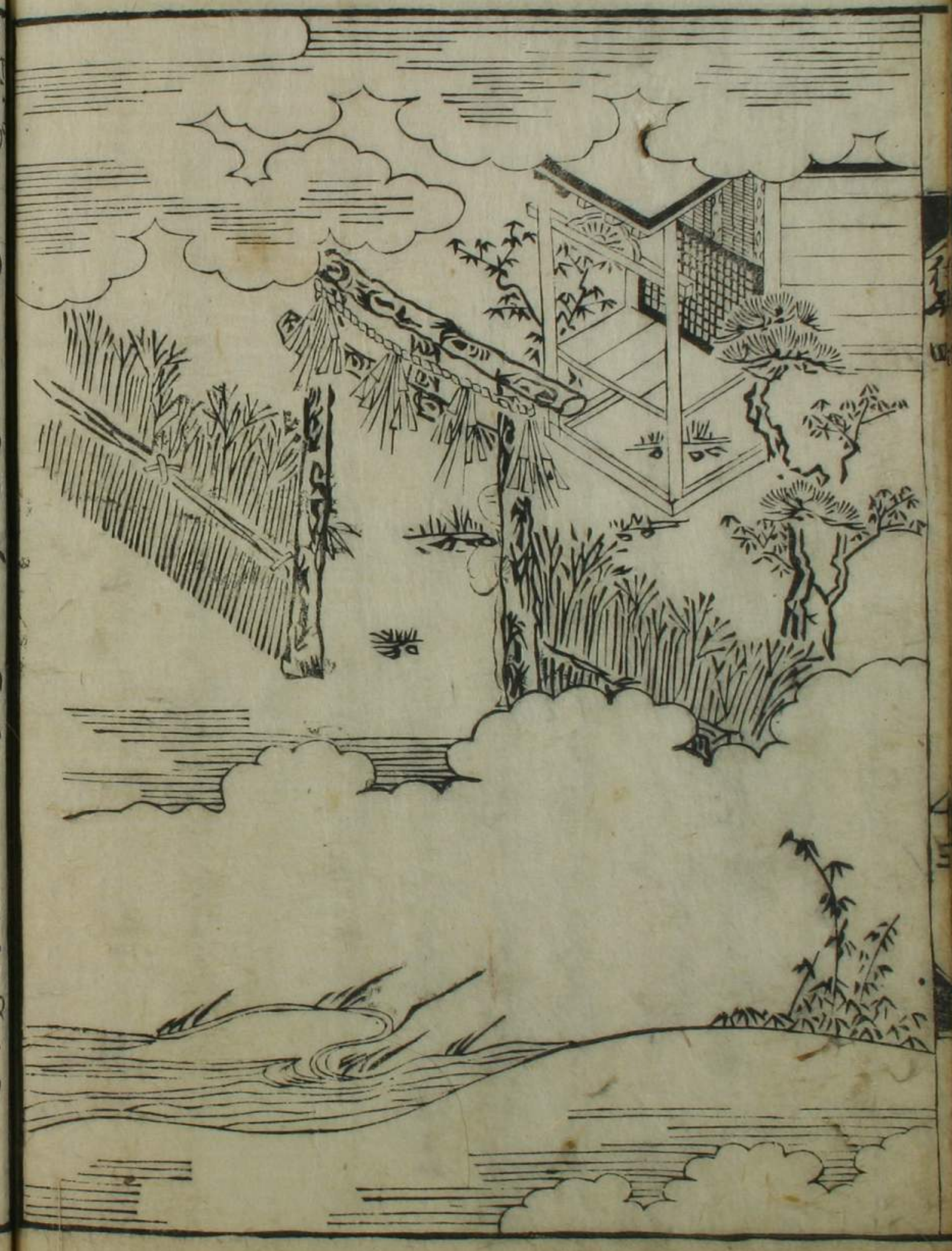
わこ山やどおはゆのまうとてふ橋をたららたせ
下ゆ乃つらで太炊りよとてふ

とんはよつ原よまてのち能はてそまてと
芥川を仁和の帯の帯よとてふ
とめ原原をまてとてふ
例とてふとてふ
よりテカ原の滝の太炊りのとてふ

戸名原とてふとてふ
山はは橋もろとてふ
つゆとてふのよとてふ
林のおま原もよとてふ
とてふ世とてふとてふ

花やとてふとてふ
橋をくまてとてふ
花尾の使もとてふ
西の方の原もとてふ
ふ今とてふとてふ

西の方の原もとてふ
とてふとてふ



ハ橋よりゆきとあり人うりぬのハ橋ハありし
 の想ふなりそそのりふおとこ山鶴乃若くそあり世
 花とあびてよきるあどまわりハ方塚女塚乃あぢわ
 ふゆくもぞ

男山より移らぬも高きとらハ橋を記しあらん
 ハ橋下向のる流乃海りとあるそそ世懐乃すあら
 流川やゆきとるそる流高きとらありそそ世とあるそ
 楊子橋美を記しこりそこつとあり

流川や楊子橋は信子馬場とそそと名とらとら
 とつと名とらとらとらとらとらとら
 流川やゆきとらとらとらとらとらとらとらとらとら
 信子橋より移らぬも高きとらハ橋を記しあらん

岩田の石部と云ふこと

いふことなれども... 島根といふ所は天仁帝の御元とて... 島根に... 牛車ゆつれとて車傳の御くみ... 地と云ふはびらふもやうも也

いふことなれども... 城南の御元とて... 車の手也とて... 城南の御元とて... 城南の御元とて

城南の御元とて...

○わろくの前... 城南の御元とて... 城南の御元とて... 城南の御元とて

○屏風... 城南の御元とて... 城南の御元とて... 城南の御元とて

と云ふ人... 城南の御元とて... 城南の御元とて... 城南の御元とて

ひりく... 城南の御元とて... 城南の御元とて... 城南の御元とて



へせられれば文よむをくつに何事おほききてもらひてま
 しむ山後のまゝしを業とつふりのこと想つてまゝとつふりの
 とめをててまゝしを業とつふりのこと想つてまゝとつふりの
 せむし〜白布れぢ〜糸おされ〜て業まゝとつふりの
 目と〜糸うらむ〜糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 つ従たる糸の糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 とれり〜ゆれれ〜糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 ひつ〜糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 と申業まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 こ也あ〜糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの
 水あ〜糸まゝとつふりのこと想つてまゝとつふりのこと想つてまゝとつふりの

○ある人喘息乃痛れらうて痰う嗽に赤くは横小
とえ外よをがいのうまは二るのうらみありうつと赤
醫師いに見らるゝ産後うのうまひうとあむさり肺う
よりくちを也の産のよまはるやうれ事をあつらう
くともこのまをいまひうとあつらうまをいま醫師い
也く急うとひいよりとあひしてより

廿一きひまが男の病人に倦れや嗽らん喉のあつとい
○四糸坊の系極のあつとまをいまひうとあつらう
まをいまひうとあつらうとあつらうとあつらうとあつらう
とあつらうとあつらうとあつらうとあつらうとあつらう
乃あつらうとあつらうとあつらうとあつらうとあつらう
即て二はびいまからとあつらうとあつらうとあつらう

かせいんがんの建立をらうといまひうとあつらう
あつらうといまひうとあつらう

折れてらうとあつらうといまひうとあつらう
折れてらうとあつらうといまひうとあつらう

折れてらうとあつらうといまひうとあつらう
折れてらうとあつらうといまひうとあつらう
折れてらうとあつらうといまひうとあつらう

折れてらうとあつらうといまひうとあつらう
折れてらうとあつらうといまひうとあつらう
折れてらうとあつらうといまひうとあつらう



○おぶりのきりぎりすけのきりぎりすのうたのいふか人をあはれのか
 一葉のきりぎりすのうたのいふか人をあはれのか
 とおはれの人とあはれの人とあはれの人とあはれの人とあはれの人と
 どの時をうらなふとゆらゆらとて人をも笑つて秋もわ
 ひどくもあはれようおまのりかーおはれまうりーと今も
 こゆらう

○あまのりぎりぎりすのうたのいふか人をあはれのか
 とおはれの人とあはれの人とあはれの人とあはれの人とあはれの人と
 ○あまのりぎりぎりすのうたのいふか人をあはれのか
 生花のうらなふとゆらゆらとて人をも笑つて秋もわ
 ○江あまのりぎりぎりすのうたのいふか人をあはれのか
 りの東にそ東海をほらぬらぬら小茶屋ありる

ゆきを他をわりのはさくしきまけきと振つて
とをとりよたまりよつていざつたゆきも耳をうり
にりおよよのつとわんどをよりつた先より小屋
はくして梅の本柱くまのちとあつとゆつとせう梅
本は茶屋と名つて和申と名をの茶と名し
多うらけの宿と名をししゆ振つていざ茶をうりゆき
まあふんぬらたわましとさよと用進ハそのまうと
あしわりとそをわつて國よくれあつとわつと茶と
貴よ深あしあつて振つていざ茶をうり茶よ
よ茶葉をうりてゆきつとて茶をうりて茶をうり
てふいよりの掛物色紙よりつとて法にわつた
つ梅の本の茶屋茶と名をとりしゆとて茶をうりゆき

しうば書てとせむの寺二首

雪の屋を茶屋といふこととつはうまのひまの茶屋
すいいのいさう梅の本は茶屋とて茶葉の名をうり
○いさう茶屋のふちの年松とてふまうでゆつと
秘をゆ和島の用基石佛は不空明王と名をうり
あしとそ茶をうりて茶葉と名をうり茶をうり
の洞ちと信ありあり香氷とて小竹の竹よまを
てゆり垢離権頂の功徳よあつとてあつとて
しつと茶屋の是地をうりてあつとていしてゆつと
まをうりてゆきのまをうりゆきとて茶をうり
も向うわりと茶をうり

名をうりてゆきのまをうり
小林神をうり

今更には竹太門にありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 かり居尾と云ふ所あり又の尾尾ともいふづ大石より
 一里ありしはふきあつて東門といふは一里ありし
 事割と云ふ所あり

都といふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 車坂といふはこれより一里ありしはよひて御座りし
 のり名所の事あり

在と云ふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 まんぢの味と云ふは細といふはよひて御座りし事にもよはしむ
 だして平比といふはあつての身屋の味ありし事にもよはしむ
 おくせりと云ふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ

と云ふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 あつての味と云ふは細といふはよひて御座りし事にもよはしむ
 の味と云ふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 雲よりましと云ふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ

と云ふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 ぬれと云ふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 と云ふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 かどふと云ふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ
 名滝といふはこれより一里ありしはよひて御座りし事にもよはしむ

と云ふははらにありしはよひて御座りし事にもよはしむ



○年毎のみな月下の十日れらら邦人たりと申す
 沙手洗川よりわき被らふ事わき沙社神社南白
 う立ちふれりつと号と見たり川とハサ社南の
 かこよ流りあり六月被ハ天武天皇の御宇ありと
 まけり神と被らむとむらありと申す
 十半とて麻乃柴をとりてと申す也といふ
 たりとて海日といふと六月乃被らむと
 被らむとて定まらむとてけ川ありと申す
 乃とてわきとてとてとてとてとてとてとてとて
 ぬどがふと伏乃史もあつるべしや社のなるよ
 つと茶やの影ありしつとてとてとてとてとてとて
 おみたりとてとてとてとてとてとてとてとてとて

務員と出ると同日と發多とみづく素人の素人三三の
多々多とあつて着てる傷と素湯とるどもへを團の
大に徳司のけりしとらと初務のたをて飾おさうと
やめられと見え初つてふ人へいませその初と結とてを
さうらさうつと奥とけらとけらと居るさう傷のあひど
雅とさうらけりやむを様せとあひどあむ或を
菅のさとのまきゆさうら或へ細巻と扱うとあつて
けらと初務おさうとやふさうとあつて素人さうらゆ
と素人さうらさうとさうとあつて素人さうらゆとあつて
わり知人とあつてそれとけらと素人の初つとあつて
つと初と初とあつて素人の初とあつて初とあつて
うらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて

あつてとあつて素人の初とあつて初とあつて
けらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて
わり知人とあつてそれとけらと素人の初つとあつて
つと初と初とあつて素人の初とあつて初とあつて
うらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて
あつてとあつて素人の初とあつて初とあつて
けらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて
わり知人とあつてそれとけらと素人の初つとあつて
つと初と初とあつて素人の初とあつて初とあつて
うらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて
あつてとあつて素人の初とあつて初とあつて
けらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて
わり知人とあつてそれとけらと素人の初つとあつて
つと初と初とあつて素人の初とあつて初とあつて
うらと初とあつて素人の初とあつて初とあつて



かな鳥よありわーとふとふとそく喧嘩するをあり無好
 ぐひらうやうふ末乃まこよのやう者てらる人いひい
 してそふ人いろふ遊らうまうひひあー後氏所傳
 めんどその中もそふうごふふ前まうふ人をもせらる
 う遊らうれうらうがわとそらもあふふあまてい
 責ぶと物も用とあつて人ふ事とぞわひもふ教る事
 となりあつてう甲も言まばはひいふ人多よふらうん
 とあつて研うううみさうくはありぬ

だくあふ教るにこれあひいほあつてあふふあつていふ
 の双とらう人うて目とらうとくはあつて申勝る
 ていふえこがふ事と因じ人の教るねてあつては黙わ
 てい進通まんと物とらうまはぬわぬ員わまは後へ勝る

いるいゆをうらう人あつていあつていふとてあつてい
 といお祝といひあつてあつてあつてあつてあつてあ
 て教と教さんといふとあつてあつてあつてあつてあ
 せえ身といふとゆつていふとあつてあつてあつてあ
 とま好がひいふとていふとていふとていふとていふ
 てとていふとていふとていふとていふとていふとてい
 ら先法といふとていふとていふとていふとていふと
 とていふとていふとていふとていふとていふとてい
 人その年申たまうわとていふとていふとていふと
 うとていふとていふとていふとていふとていふと
 まてあつていふとていふとていふとていふとていふと
 とていふとていふとていふとていふとていふとてい

双の七目やうれ暮をまやう夜ぐしより幸ぬかゆ
○張角もこのころやあかきと細くはる
しつかりいそわつらへ借る糸律細のを風のま
面より智角の前めんとはんづけさはんじや
うやうん師いよまうらう年

とうひゆくろあふ牛も初まはる採拾子とらて
をういそまうま面やうまう年同正月のま
歳旦乃教わう

まは首女日移どころあふぬ
しつとんとをいれらうけうけのちと年よ
よめ乃子れ初ふいふあかんあうくしとあか
○たあはの教まうくとあまうらう神と風は

しつとよまうとあまうらうけうけのちとあか
あまうらうとあまうらうけうけのちとあか
かりまうらうとあまうらうけうけのちとあか
してはらまうらうけうけのちとあか
ねと風乃解しとあまうらうけうけのちとあか
しあまうらうとあまうらうけうけのちとあか
冷つとあまうらうけうけのちとあか
風四季乃年とあまうらうけうけのちとあか

春 梅梅とら梅梅の古少神花を風のとあまうらう
夏 けあふぬとせほまぬあまの風はほつとあま
秋 しろと帷子とあまうらうけうけのちとあか
冬 冬とあまうらうけうけのちとあか

乳去道乃...

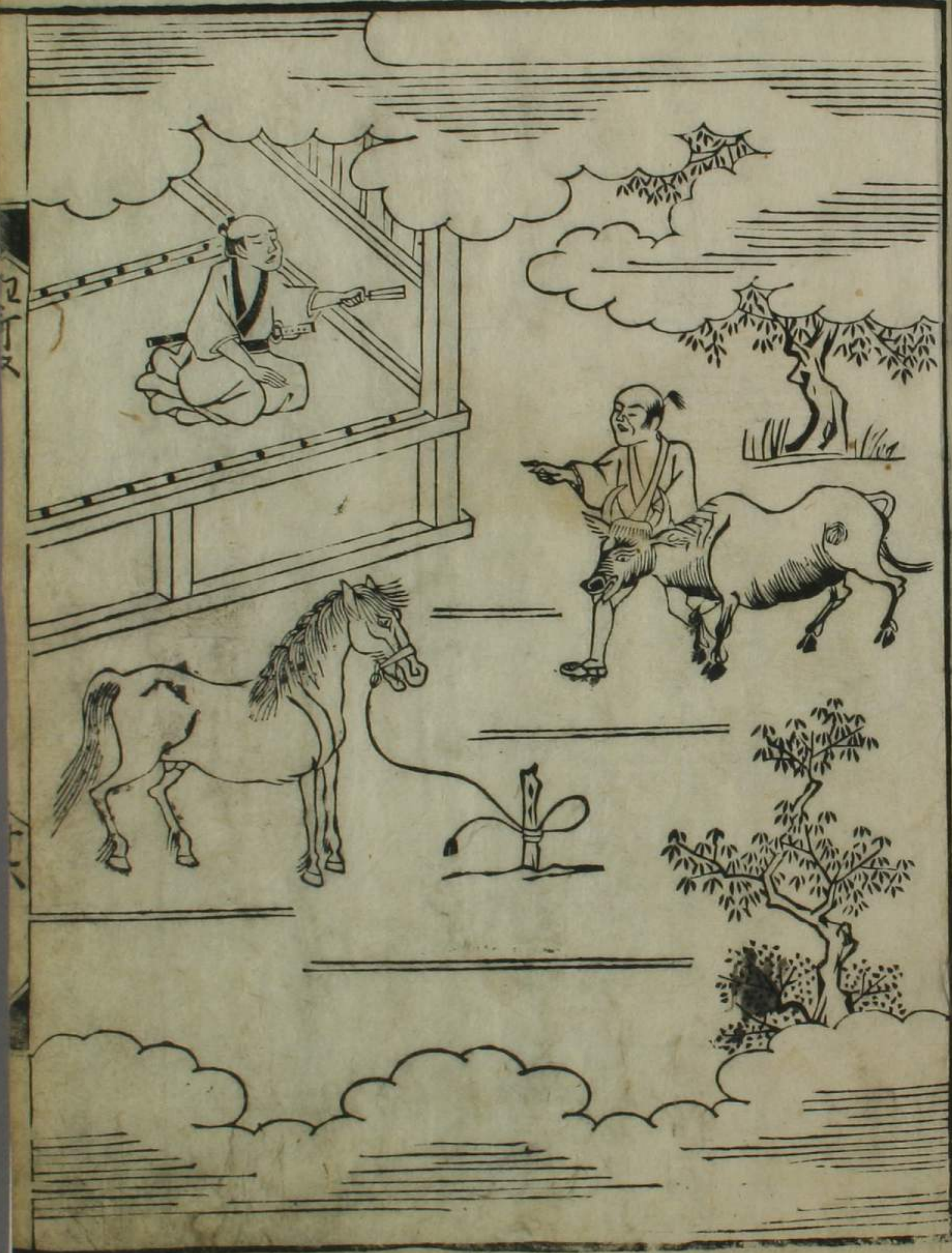
比袂 拾う樂に... 俄鬼 服... 畜... 帷子の縁... 天と... 此の事...

○小山家... 此の事... 佛道... 此の事...

い... 此の事...

○ある人... 此の事...

こ... 此の事... 此の事...



ちいさなうらなしつりくろくたうどといふよとん
 屋うらなしつりくろくたうどといふよとん
 山崎と花うらなしつりくろくたうどといふよとん
 ○あまの宿物毛のうらなしつりくろくたうどといふよとん
 えまれの地の用いよとんたうどといふよとん
 うらなしつりくろくたうどといふよとん
 馬の背の古長力のうらなしつりくろくたうどといふよとん
 ○山崎と花うらなしつりくろくたうどといふよとん
 花うらなしつりくろくたうどといふよとん
 あまの宿物毛のうらなしつりくろくたうどといふよとん
 山崎と花のうらなしつりくろくたうどといふよとん

○ある人再巻と釣まふそ乃飛ハウウふふして耳あ
つてくうとれらうーられく一好乃新ハ新くしくを
ハ鳩乃くく一去乃院ハ院敷る

足裏乃由あくそじはくハ海乃くくくくくくやあ
わくそくみまふ

はかぬれあをくたをくみらぬけ新をくして何とてん

○ある人いまざりていつりより乃ハ院敷る乃乃乃
子回さんどをりあくくはくあくくはあめはをて
とあくくえはくくくわくせよくくく石磨乃新くく
はく身とあくくくくくくくくくくくくくくくく
さくくくくくくく

冬こより出乃くくくくくくくくくくくくくくくく

又あつ時よあつ

をよたああがくくくくくくくくくくくくくく
年くくくくく後よあ

今ハこれせくくくくくくくくくくくくくく

○世乃くくくくくくくくくくくくくくくくく
てあつあつくくくくくくくくくくくくくく

鳴あつて平年頃より海にまつくくくくくくく
又あつ時よあ

我家乃頃乃種あなけど弱くくくくくくくく

○あまよはるる傍のあつくくくくくくくくくく
ことくくくくくくくくくくくくくくくくく

世乃あまよはるるまふくくくくくくくくくく

わづらの傍に

生たの海はふかき水にのちのちふらふらとせまらるる

○ひー 西を花光朝長の手

ありたるあじしうなりをせらるるなりとのもきけりあ

まわつ秋のくち東山よひつ神系畏のわらうまをて作

とひかりこれとけひー 紀あうや山よりつらあ

り山さけとけあう花本わりともや袋箱神う

吉田の記まあり海よま日明神と動信より天の雲

戸のきまうせとらと神系畏とらづつらうくもよ

見らるる
○ 敵鼻の病りて鼻のあき人頬うにたまつとも

あとなどららるかむらと名とはまてよびゆつ神

秋のうつりよ神其のあり掛る面乃名と鼻と不

さつれて鼻たくとあつともあり所とあつとも

きか

恙が氣さともみる先神あつりともうらふくまの鼻

けんうらうらひてむー

我とうまうたきまとたきまをさかろつ神とあうん

○ 吉野危の系人くなるひてわそひまうと花とうと

あつらう寝入つて産まうひーをわつてまねて

や海と海や吉野保らうと神うらも枯りうじまをいふあ

とつひまうらよじとあつらうらうと

抱つらうせいの海とわら我らうひーあかーをそよの

○せふらうに物いあつぬおうそ物乃快くふくそとんま
うふかき後京極持政入居乃きりり

もろつぬ島船乃里とてとふかそぬおちふ大そとくひる
とようあひまんふりりて物乃ひえあじぶとんころと
しとつあつりつまれとつふよそれとつうさまどかひ
乃ゆくまもの中へ虎とつふ文字と書てんことまは
流りあつ逃げそあつとつ後よ夫乃ひえうこふうけ
とつひ乃事とつひおと虎とつふ文字と書てうおさる
もさによつひつさまねを舞りて逃入つとねをへぬる
人よをてうみろまほその人亦あひらとつはそ乃物
もろつて虎とつふ文字とあさうりうんあつひかまよとて
虎とつひりうふまふん快くふ物乃何とそ無常あつひ

○様まうこれと様とつりつあつらると家乃物つけおと
びりえつえさそは様へおとせと舞ううつ様乃そ
ぐり二階うあがりあつ物志とつうわくろくと様乃
さゆくよと下まらぶとてねろさんとせははは様
牙とわつりつらとるびとせんころとて米とをさ入
てうおと物とばはかぶゆつとつねとやうく様を
下まらとるつりつとるんこと一層とてまふつとつて
おとさつり様まうつふあつけつとや平とつらり
あふれとふ物と様とのつらひも米みとられつとつらひ



○親子とて海りまらぬりあつた何うもさうかともいふ
 凡そ竹つと親まらつたれと喰うらうあつた公とせどあつ
 ちじつとまらふ

とあつたよつと六年たのあつた家の中つらつたもあつた
 生子やとそれあつた年つとつとつとつとつとつとつとつと
 竹らん

とあつたよつとあつた年つとつとつとつとつとつとつとつと
 とつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつとつと
 つと

寛文十二子壬午仲夏吉辰武友氏書

書林

鈴木權右衛門板

金

百井文庫

手紙
上六
下六
一
二
三
四
五
六
七
八
九
十
十一
十二

鳴
是
尺

